



## つなぐちゃんベクトル

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会社内誌 臨時増刊 302号 2011.3.22 発行 社会政策研究所

=====

### ブリヂストン工場に障害者就労支援施設 彦根で開所式

読売新聞 2011年3月22日

彦根市高宮町のブリヂストン彦根工場内に21日、障害者への職業訓練を行い、就労を支援する「働き教育センター彦根」がオープンし、開所式が行われた。ここで学んだ障害者らは将来、ブリヂストンや関連会社で働くことを目指しており、こうした施設が民間事業所内に設置されるのは、全国初という。

学校法人「関西福祉学園」(本部・京都市伏見区)がブリヂストンの協力を得て開設した。同学園の別の施設で、コミュニケーションなどについて学んだ障害者が対象で、1年間、工場で作業実習などを受ける。また、パソコンやガーデニングなども学ぶ。定員は10人で、4人が4月から通うことが決まっている。

開所式には、彦根工場幹部や県内の特別支援学校関係者らが出席、関西福祉学園の辻勝司・理事長が「同様の訓練施設の設置が多く企業に広がってほしい」とあいさつした。

### 犠牲者悼む調べ 芦屋で慈善コンサート

読売新聞 2011年3月22日



被災地への思いを込めてサックスを演奏する野田さん(右)(芦屋市で)

東日本巨大地震の犠牲者を悼む「チャリティー・コンサート」が20日、芦屋市船戸町の音楽ホール「山村サロン」で開かれ、約140人が思いのこもったサックスやピアノの調べに耳を傾けた。阪神大震災での体験を契機に、障害者への音楽療法に取り組んできたサックス奏者の野田燎(りょう)さん(62)が「音楽による支援を」と企画した。会場では、涙ぐむ市民の姿も見られた。

野田さんは大阪音大卒業後、ヨーロッパで活躍。2000人収容の大ホールで演奏するなど、順調に音楽家の道を歩んだ。しかし、帰国後の1995年に西宮市で被災。半壊した自宅を脱出し、近所で救出作業に当たったが、がれきから引き出した男児はすでに亡くなっていた。

「自分は人1人も救えないのか」

無力感にさいなまれ、1週間ぼう然としていたが、サックスを手に取り、ジャズの名曲「サマータイム」を演奏すると「悲しみや憤りが涙とともに、体から抜けていった」と感じた。それ以降、重度の意識障害の患者らに向け、演奏し、意識の回復を目指す音楽療法に取り組んできた。

コンサートでは野田さんが「被災された方に、僕たちみんなが一緒にいることを伝えたい」とあいさつ。黙とうの後、サックスとピアノでバッハの「G線上のアリア」などクラ

シック、シャンソン計24曲を演奏した。ダンスや歌も披露され、参加者は涙を流したり、軽快なリズムに手拍子を送ったりしていた。

会場には、募金箱も置かれ、この日だけで約40万円が集まった。全額を日本赤十字社へ寄付するという。

野田さんは「音楽は、言葉で伝えられない気持ちを伝えることができる。現地が落ちついたら、演奏に行きたい」と話していた。

## 障害者ら海路で避難 県立海洋科学高の実習船などで

朝日新聞 2011年3月22日

湘南丸から下船する人たちを松沢成文知事らが出迎えた = 21日午前9時すぎ、三浦市三崎の三崎漁港

被災者支援のため、福島県いわき市に寄港していた県立海洋科学高校（横須賀市）の海洋実習船「湘南丸」など2隻が21日、三浦市の三崎漁港に帰港した。現地で乗り込んだ知的障害者33人は県の入居施設など3カ所で受け入れる。県は今後も、福島から県外避難を希望する障害者を受け入れる方針だ。



午前9時、雨風が一層強まる中で湘南丸が3

日ぶりに三崎漁港に着岸した。障害のある人たちは傘をさしてもらったり、おんぶしてもらったりして下船。横浜市の障害者福祉施設職員が手作りした「ようこそ かながわへ」の横断幕を見ると笑顔がこぼれた。

湘南丸は18日夜、三崎を出港。いわき市の小名浜港に到着し、毛布1千枚や500ミリの飲料水1万本、医薬品などを送り届けた後、帰りに知的障害のある人たちを乗せて現地を出港した。地震後に三崎に緊急寄港していた福島県の海洋実習船「福島丸」も先導役として同行。33人を湘南丸と分担して乗せて来た。

33人はいわき市内の中学校などに避難していた。ストーブが足りず、寒さが身にしみた。風呂に入れず、食べ物もおにぎり、パンばかり。引率役の社会福祉法人いわき福音協会の職員、横田香織さん（32）は「皆、船内で食べたカレーがうれしかったようです。温かいものを食べたのは11日から初めてだったから」と代弁した。

今後は知的障害者の入所施設「県立ひばりが丘学園」（横浜市港南区）など県内三つの施設に分かれて滞在する。受け入れ先に着いたら、すぐに風呂が用意されているという。

ただ、船での運搬は時間がかかり、帰りは海が荒れて船酔いする人も多かった。松沢成文知事は「20時間の船旅に耐えられるか、漂流物が船にあたるのではないかと心配したが、皆さん元気で到着してうれしく思います。クルーを休ませて第2便、第3便を出せればと考えている。今後は陸路も考えていきたい」と話した。（川上裕央）

## 燃料不足看護に支障 高齢者・障害者の訪問支援

河北新報 2011年3月22日

車があっても使えない訪問介護事業所。ヘルパーらは自転車や徒歩で家々を回っている = 仙台市若林区のハッピー仙台中央ヘルパーステーション

震災後、在宅の高齢者や障害者に対する看護や介護の支援に大きな支障が生じている。燃料不足で車が動かせなかったり、遠出できなかつたりするからだ。優先的に給油できる緊急車両に指定されず、指定されても被災地の救援車両ではないた



め給油を断られることがあるという。

仙台市若林区のヒューカス訪問看護は、燃料不足を理由に訪問先を原則的に事業所から半径5キロ内に制限したり、訪問回数を減らしたりしている。所長の加藤恵美さん(42)は「当初は訪問看護と言えば優先的に給油できたが、現在はできない」と話す。

訪問介護を実施している泉区のNPO法人「あいの実」では、スタッフが自転車でガソリンスタンドを一軒一軒回り、給油可能なスタンドの情報をメールでヘルパーらに連絡し、燃料確保に努めている。

ヘルパーらの車両は緊急車両に指定されないため、スタンドでは一般車両として給油待ちの列に並ばざるを得ない。ヘルパーが出向けないため、病院に居続ける要介護者もいるという。

青葉区の「マリーン調剤薬局」は、訪問薬剤師の車が緊急車両に指定されたが、市中心部のスタンドで給油を断られ、宮城野区東部のスタンドで入れる羽目となった。

代表の田畑秀香さん(56)は「依頼があればどこにでも行くが、帰りのガソリンが間に合うか、スタッフは常に不安を感じている」と明かす。

病床が不足している医療機関は、震災で身を寄せた高齢者や障害者について、自宅のライフラインが復旧すれば帰宅させている。看護や介護に携わる関係者からは、在宅支援の不備による「二次被災」を懸念する声が出ている。

## 乳児や障害者 ケア必要 福岡市の保健師らが帰着



西日本新聞 2011年3月22日  
被災地から戻り、記者団の取材に応じる福岡市の保健師や事務職員たち = 21日午後4時半すぎ、福岡空港

東日本大震災で大きな被害を受けた仙台市太白区の避難所に向け、16日から派遣されていた福岡市の保健師2人を含む市職員4人が21日、空路福岡市に戻った。現地では18-20日の3日間、保健師は避難所で健康相談に応じ、事務職員2人は車の運転や関係機関との連絡調整に当たった。4人は長引く避難所生活で被災者には心身の疲労が蓄積しており、ケアが急務と報告した。

福岡空港で記者団の取材に応じた4人によると、太白区は建物の倒壊はなかったものの、内部は家具などが散乱し、避難所に身を寄せる人は多かったという。避難所では食料は確保されつつあったが、ガスや水道が途絶えたまま。風呂にも入れない状態だった。

1日2-3カ所の避難所で約10人ずつ健康相談に応じた。不衛生な中で皮膚かぶれを起こした赤ちゃんや不眠症を訴える人、血圧が上がっているお年寄りがいたという。

6年前の福岡沖地震でも被災者支援に当たった市地域保健課の保健師、松本久美子さん(49)は「水が出ずに衛生面が悪化し、(お年寄りや乳児など弱者をはじめ)ストレスの原因になっている」と指摘。早良区役所地域保健福祉課の保健師、竜口千鶴さん(57)は「ライフラインの復旧に手間取るほど、心身共に疲労が大きくなっている。自分で訴えることのできない障害者もいて、どうケアするかといった課題は多い」と話した。

4人は16日、寝袋や食料、医療器具を詰め込んだ公用車で福岡を出発。車は交代で福岡市から派遣されるチームのために現地に置いてきた。

## 灯油で温まって 県知的障害者支援協が福島施設へ送る



岐阜新聞 2011年3月20日

東日本大震災の被災者を支援するため、県内の64知的障害者支援施設でつくる「県知的障害者支援協会」(小坂孫次会長)は19日、福島県内の知的障害者施設に向け灯油3キロリットルを送った。

福島県知的障害者福祉協会と連絡を取ったところ、被災地の施設で暖房機器に使う灯油が不足していることを知り、緊急輸送を計画。岐阜県と福島県も協力し、今回の輸送に至った。

まとまった灯油の提供と輸送には、美濃市吉川町のオイル販売会社「中濃オイル販売」(河合芳美社長)が協力。灯油代は同支援協会の会費の一部を充てた。灯油は福島県内の約60施設に直接届けられるという。

同市生櫛の県中濃総合庁舎駐車場で行われた出発式では、灯油を積んだトラックに乗り込んだ河合社長と同支援協会職員の2人を関係者ら12人が激励し送り出した。

小坂会長は「あちらはまだ厳しい寒さと聞いている。無事に届き、少しでも温まってもらえれば」と話していた。

## 災害弱者どう守る



朝日新聞 2011年3月21日  
おかゆやすりつぶしたリンゴなどの離乳食を9カ月の藤井陽太君に食べさせる慎吾さん(左) 浩子さん夫妻=20日昼、山形市総合スポーツセンター

被災地を逃れて来た人たちの避難所生活はいつまで続くのか。県内各地の避難所では乳幼児や障害者、高齢者といった「災害弱者」へのケアの動きが目立ってきた。県災害対策本部によると、20日午後3時現在、55カ所の避難所に3834人が避難している。

### 高齢者・子供の体調ケア

千人以上が寝起きしている山形市総合スポーツセンターの避難所では18日から、山形済生病院の医師らが「エコノミークラス症候群」の検査を始めた。長時間同じ体勢でいたりすると起こる症状で、足の静脈が滞って血栓ができる。新潟県中越沖地震でも避難者に発症者が相次いだ。

20日までに寝たきりの高齢者や下半身にむくみやだるさを感じている人ら約100人が受診。医師が足の状態を診察し、看護師が「水分をこまめにとり、循環をよくするように」などと助言した。軽度の血栓が確認された人には医療用ストッキングを配る。

検査を受けた福島県南相馬市の高倉幸さん(89)は「異常がなくてよかった」と一安心していた。統括診療部長の折田博之さんは「血栓が肺静脈に届くと重大な症状になることもある。啓発して予防することが大事」と強調する。

整体院などを経営する愛楽グループ(山形市)は20日に整体師を派遣し、無料で整体などを行っている。

市は避難所の一角に健康相談室を開設している。保健師や助産師が常駐し、不定期ながら医師の診察もある。「持病の薬が不足している」という高齢者や、子どもの体調不良の相談が多いという。

食事も20日から、炊きだしで離乳食と高齢者用の食事が別に配られるようになった。南相馬市の会社員藤井慎吾さん(32)の長男陽太君(9カ月)は、離乳食のおかゆをおいしそうに食べた。母の浩子さん(31)は「おにぎりをみそ汁などでやわらかくして食べさせていたが、便の調子がよくないなど心配だった。ありがたい」と笑顔で話した。

手話通訳のボランティア舟越芳子さん(62)らも活躍している。聴覚障害者で相馬市

から家族と避難している管野三博さん（64）は、近隣の入浴施設の場所など生活情報を舟越さんから聞き、役立てている。管野さんは「支援してくれる人とコミュニケーションがとれて大変助かる」。

約200人が避難する上山市体育文化センターでは、市医師会の医師が2日に1回、健康相談に乗っている。「心配なことがある方は声をかけて下さい」。ボランティアの助手が声をかけると、「クスリが切れそうです」「足が痛い」と訴えが相次いだ。南相馬市の女性（70）は「お医者さんにアドバイスをいただくと安心できます」と話す。

市医師会の佐藤紀嗣会長によると、今後、心的外傷後ストレス障害（PTSD）などの症状が表れる可能性もあるという。佐藤会長は「精神的な面でもしっかり考えていかななくては」と話した。

天童市にある県の施設「青年の家」は市と協力し、未就学児のいる家庭専用の避難所になっている。8人部屋に2段ベッドがあり、風呂も使える。市の担当者は「子どもは泣いたり騒いだりするので、周りの入所者もストレスを感じるし、親も気を使う。居場所を分けるのは、互いにとっていい」。青年の家で6歳と9歳の子と暮らす南相馬市の女性（35）は「前にいた公民館では子どもが布団の上を走り回ってしまった。ここは気を使わなくていい」と話す。

相馬市の漁師、原田陵次さん（21）は両親や兄弟、婚約者の宍戸有美恵さん（21）を連れて17日から鶴岡市が設けた羽黒農村改善センターの避難所に避難している。宍戸さんは妊娠5カ月。原発事故が起き「赤ちゃんのために」と相馬市に残った家族と離れて避難した。

鶴岡市は市内6カ所の避難場所を、保健師が毎日巡回して健康相談に応じ、市の施設で妊婦検診や希望によっては予防接種なども行っている。

「温かい畳の上で過ごせ、診断も受けられるのでありがたい。でも本当は家族のいる場所で産みたい。これからどうなるのかな」と宍戸さんは不安そうに語った。

## 社説：震災から10日 人の強さを信じて進む

朝日新聞 2011年3月21日

2011年3月11日午後2時46分から、きょうで10日を迎える。

判明した犠牲者の数、8千人以上。戦後日本が経験した最悪の、未曾有の災害だ。制御不能に陥った東京電力福島第一原子力発電所では、放射性物質の大量放出をくい止めようと、懸命の作業が続けられている。

私たちが揺さぶったものの恐ろしさに、改めて身がすくむ。

大津波で街がいくつも破壊された。泥とがれきの茶褐色の光景が、目に焼きつく。愛する人や仲間を捜し続ける人がいる。いまなお安否がわからない人が1万8千人以上いる。

救援をもっと厚く

被災地は次第に、大量の死という現実に向き合いつつある。大災害はともすれば、数百、数千という数字で語られがちだ。でもその一人ひとりに、海辺の町で過ごした豊かな時間があったことを、心に刻みたい。

絵を描くのが好きだった宮城県石巻市の佐藤愛梨（あいり）ちゃん（6）。15日が卒園式のはずだった。幼稚園のバスの中で見つかった。

同県東松島市の自宅の庭で仰向けに倒れていた熱海つよしさん（79）。息子が母を捜し出したとき、笑ったような顔をしていた。

長い、つらい、悲しみの時が続く。営んできた暮らしがそっくり流され、その立て直しも重い課題だ。

ともに泣き、じっと耳を傾け、支えたい。地震翌日、被災地入りした記者に「町の惨状を早く伝えて」と訴えた人がいた。その言葉も忘れまい。

三十数万人が、不自由な避難所での生活を続けている。

福島原発の周辺に住む人は、故郷がどうなるのかという不安とともに、村ごと、町ごとの退避を強いられた。地震、津波、原発事故の三重被害だと、怒りを込め訴えた市長がいた。

先週は真冬の寒さが各地を襲った。避難中に亡くなる人が相次ぐ。薬も飲み物も食べ物も燃料も暖かさも、足りない。物資は滞り、被害が大きい所ほど届きにくいジレンマもある。

使命感を胸に

災害直後の緊張が解け、沈みこむ人が増えている。ストレスと疲労は限界に近づいている。絶望と孤立感が、生き延びた命を刻々と削る。

もっと急がねば。救援をもっと厚くしなければ。

福島県相馬市の避難所で被災者自身がボランティアを組織した。班長の一人、大谷亮一さん(67)は「私らは生き残った。感謝の気持ちなんです」。

近くの病院にひびが入り、患者が身を寄せた岩手県立釜石高校。学校に寝泊まりする生徒が支えとなった。体育館入り口に、避難者向けの寄せ書きがある。「上を向いて歩こう」と。

災害の最前線には、使命感を胸に体を張る職業人たちがいる。

原子炉近くでは、東電や関係する会社の社員たちが危険な作業を続ける。

自衛隊員、警察官、消防隊員が応援に入った。真っ先に被災地に入り、多くの人を救い出したのも彼らだった。

大きな揺れの後、町を守ろうと水門へと走った役場職員がいた。海上保安官、医師や看護師、福祉施設職員、教師、トラック運転手、コンビニ店長、後方でフル回転する公務員……。

想定を超える事態に混乱も起きている。だがその働きぶりに思うのは、幾多の災害を経て蓄えた教訓が、多少なりとも生きていくということだ。

被災地から遠く離れて暮らす市民も無関係ではいられない。

海外から安否を気遣うメールを受信した人は少なくないだろう。日本のことを、みな案じてくれている。多くの国からの支援の申し出も心強い。

関東では計画停電に振り回される毎日だ。催しの中止や延期、商品不足。不便さはじわじわ広がる。農産物の放射性物質の数字も心配だ。雲のような不安が頭を覆いそうになる。

しなやかな市民社会

他方、長い行列やすし詰めの中を、人はいら立ちを抑えて耐えている。ネット上では、デマを打ち消し、本当に必要なことは何か探ろうとする共助空間も生まれている。

政府が積極的に情報開示をすべきなのは言うまでもない。市民もまた、冷静に事態を受け止め、自律する力が、求められているのだ。

全国の自治体で被災者を受け入れる動きが広がる。胸裂かれる思いでふるさとを離れた人を、どう迎えるか。それぞれの町で市民にできることが、格段と増えている。

熱き心と冷たい頭で。市民社会のしなやかさが問われる。

震災から10日。防潮堤、建造物、原発……。思い知らされたのは、人間が築いたものがいかに頼りないか、ということだ。政府の動きを含め、後から検証すべきことは山ほどある。

一方で、人を救うのも、支えるのも人だということ、学びつつもある。そう、私たちは少し前まで、寒々とした孤族の国できずなをどう結びあうのか、思案していたのだった。

東京消防庁の隊員は妻に「安心して待っていて」とメールを打ち、原発に向かった。石巻市では、流された家に閉じこめられていた80歳の祖母と16歳の孫が、9日ぶりに救助された。被災地で生まれる新しい命もある。

誰かがいれば人間は強くなれる。

信じよう。春はあと少しで来る。

## 社説：ボランティアと義援金をどう生かすか

日経新聞 2011年3月21日

東日本大震災の惨禍を乗り越えるために、何かをしたい。そう考える人が無数にいる。ボランティア活動を目指す市民も、小遣いを寄付に回す子どもたちも思いは同じだ。志をうまく生かす仕組みを整えよう。

災害救援に通じた一部の団体はすでに被災地に入っている。しかし現場は混乱が激しく、一般のボランティアはまだ待機している段階だ。

各地の社会福祉協議会には志願が殺到し、たとえば仙台市の協議会には毎日、数百件の電話があるという。しかしこの状況で、経験の少ない人がいきなり被災地で活動するのは難しい。ボランティアは食料なども自己調達しなければならない。

ただ、後方支援ならできることがある。政府は被災者を受け入れる地方自治体を財政支援する方針で、今後は集団疎開も増えよう。そうした人たちの「衣食住」を支えたり、病院や福祉施設で世話をしたりするのも重要な震災ボランティアだ。

地方自治体が呼びかけ、自宅の一部を提供する人を募集してもいい。それに応えて部屋を貸したり、子どもの里親になったりする動きが広がれば被災者の大きな励みになる。

善意を最大限生かすには、政府と自治体、特定非営利活動法人（NPO法人）などが連携して調整にあたらなければならない。ボランティアの窓口を広く知らせるとともに、必要な仕事と担い手がぴったり合うよう振り分ける必要がある。

それは、今後の復興段階に一般のボランティアが被災地入りできるようになってからでも欠かせない仕組みだ。阪神大震災などの経験を踏まえて、長く、いろいろな場で活動できる下地をつくりたい。

さまざまな団体や企業が受け付けている義援金も相当な額にのぼりそうだ。買い物などでたまるポイントを寄付に振り向ける「ポイント募金」やインターネット上の「クリック募金」など、寄付の形も多様になってきた。幅広く善意を寄せてもらうためには税制面の工夫が欲しい。

義援金は、最終的に国や自治体を受け取ると税務署が確認すれば所得税の寄付金控除や法人税の損金扱いの対象になる。政府は今回、「赤い羽根」で知られる中央共同募金会を経由したNPOなどへの募金も税優遇の対象にした。機動的な対応だが、対象をもっと幅広くできないか。

2011年度の税制改正では、国が認定したNPO法人に対する寄付のほぼ5割を所得税額から差し引く「税額控除」を導入する予定だ。さらに寄付がしやすくなるよう、税控除割合の引き上げを考えてもいい。

たまには太陽の子・手をつなぐ、たまにはつなぐちゃんベクトル、たまにブログたまにはチェック

